

西之内町地車新調 実行委員会通信

2023 年
3 月号

新調通信に関する御問い合わせ
西之内町会館
072・444・7712

西之内町新調地車

彫刻の物語背景と紹介（22）

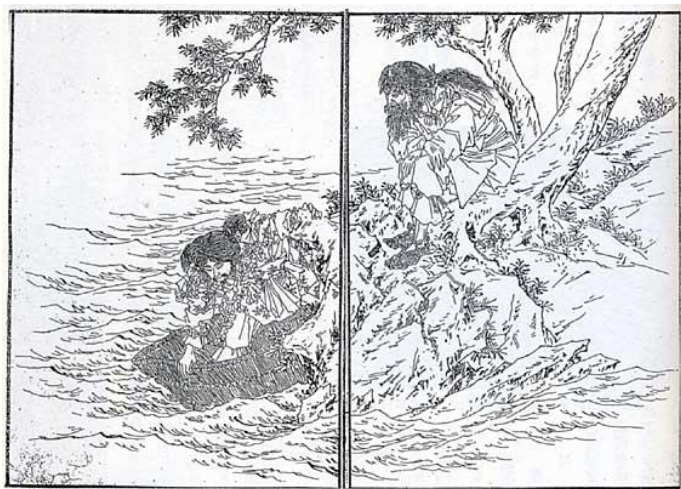
♪ 豊玉姫と山幸彦 ♪

暖かい春の日差しを感じる頃となりましたが、西之内町の皆様におかれましてはお元気でご活躍のことと存じます。今年、初めに十二支のお話をしましたが、新年度を迎えるにあたり、新しい生活環境などで不安な気持ちの方もおられると思います。この新調通信でお楽しみいただければ幸いです。

さて、先月号では地元になんだ彫刻をご紹介しましたが、今月号も引き続き豊玉姫と山幸彦のお話をしたいと思います。

瓊々杵尊（ににぎのみこと）と木花開耶姫（このはなのさくやひめ）の子、海幸彦は海の漁を、弟の山幸彦は山の猟をしながらそれぞれ暮らしていました。ある日、山幸彦は兄に頼んで、お互いの持ち場を交代してもらい釣りに出かけるのですが、魚は釣れず、兄から借りた大切な釣り針をなくしてしまいます。山幸彦は自らの剣（十拳剣…とつかのつるぎ）をつぶして千五百本

の釣り針を作って差し出しても許しを得られず、海辺で途方に暮れていました。そこに現れた潮の神である塩椎神（しおつちのかみ）が、綿津見神（わたつみのかみ）を訪ねてみるように助言をしてくれました。「無間勝間（まなしかつま）の小船（をぶね）」で、山幸彦は綿津見神の宮をめざします。「無間勝間（まなしかつま）の小船（をぶね）」とは、目が堅くつまった竹



塩椎神と無間勝間にのる山幸彦

籠の小舟の意とあり、「今もベトナムでは細い竹で編んだお椀型の小舟が用いられている」とあります。また『日本書紀』には山幸彦が乗ったこの舟について「無目籠（まなしかたま）」「無目堅間小船（まなしかたまのをふね）」との記載をみることができます。

さて、綿津見神の宮に到着した山幸彦は、塩椎神の助言の通り、神聖なる桂の木の上で待っていると、海の神の娘・豊玉姫の下女が美しい器を持って水を汲みにやってきました。泉をのぞくと影が映っており、仰ぎ見ると、麗しい男が座っているではありませんか。山幸彦は下女に「水を飲ませてくれないか」と頼みました。下女はすぐに水を汲んで、美しい器で差し上げました。山幸彦は水を飲まず、首飾りの珠を外して口に含み器に吐き出しました。すると珠は器にくっついてしまいました。下女は珠を取ろうとしましたが取ることが出来ません。それで珠をつけたまま、豊玉姫

のところに持って行きました。豊玉姫は珠を見て下女に尋ねました。「もしや、誰かが門の外にいたのですか」下女は答えて言いました。「人が桂の木の上に座っています。とても麗しい男ですわ。我が王きみ（綿津見神）にも増してたいへん尊い方の方です。その方が水を所望されたので差し上げましたが、水を飲まずにこの珠を吐き入れられました。しかし、それを取ることで出来ませんでしたので、入れたまま持ってきたのです」豊玉姫は興味をひかれ、宮を出て山幸彦を見てたちまち恋に落ち、将来を契り交わしました。そして豊玉姫は父の綿津見神に告げました。「我が家の門に、麗しい人が来ております」海神は自ら宮を出て山幸彦を見て、「この人は天つ彦の御子、天空の御子様だ」と言って、すぐに宮中に引き入れました。アシカの皮の敷物を八枚敷いて、絹の敷物八枚をその上に敷き、その上に座らせて、台に載せた数多くの品物（結納品）を供え、ご馳走し

て豊玉姫と結婚させました。こうして三年の間、山幸彦はこの国に住むこととなり、先月のご紹介をした鷗鷺草葺不合尊（うがふきあへずのみこと）の出産のお話へと続きます。この物語は、豊玉姫の出産という場面で終わります。山幸彦と海幸彦の釣り針のお話は、次月にてご紹介したいと思います。

山幸彦が塩椎神と出会い綿津見神のもとへ向かう場面と、豊玉姫と出会う場面を、新調地車の彫刻に採用しております。この題材は豊玉姫という掃守にちなんだお話でもあり、偶然にも先代地車の小屋根懸魚の浦島太郎物語にも影響を与えた部分でもあります。一連の物語とし



山幸彦と豊玉姫の出会いの場
昭和12年 日本建国物語挿絵

て見ていただき、改めて『日本書紀』、『古事記』にも親しんでいただけだと思います。

新調地車記念誌 撮影開始

新調地車の彫刻の撮影が植山工務店さんで行われました。完成しているのは全体の6割程ですが、出来上がった部分から順次撮影してお



記念誌写真撮影状況

ります。
『新調記念誌』は、他町の記念誌などを参考にし、オリジナルの要素とところも加えた構成を検討し進めております。

左上写真は撮影の状況です。1つの彫り物の大きさや、奥行きが違うので、照明の位置やストロボの強さなどを調整し撮影をしました。撮影にはかなりの時間を要し、今後第2回、第3回の撮影が必要となつてきます。『新調記念誌』の完成は令和6年を予定しています。

新調地車の彫り物

進捗報告

山本師の工房では3月に入り、見送りの人物および竹の節、特注部位の彫り物を手がけております。

見送りの騎馬武者を間近で拝見すると、その大きさに非常に驚かされます。また、植山工務店さんでの組み立て状況に合わせて、いよいよ土呂幕の仕上げに着手します。見送りは、『難波戦記』のうち大坂冬の

陣、土呂幕は大坂夏の陣と、戦国期の最後の名場面が採用されております。有名な武将の逸話や史実、講談などを盛り込んだ内容に触れることで、歴史を知る面白さもあるかと思えます。過去の彫刻場面紹介は、ホームページのバックナンバーでご覧いただければ幸いです。

新調委員の独り言

ようやく様々な彫刻が完成しつつ、地車の台木が組み立てられております。

いま、日本ではものづくりの担い手がどんどん減っていると危惧されています。どのように次の世代に技術を継承するのかということを、植山工務店さんや山本さんの工房の職人さんとお話する機会があります。待遇の面や人間関係など様々な課題があるそうですが、しかし作っていくものが形になっていく、その達成感を感じる仕事は他になく、この喜びを次世代に伝えていきたいということです。

今後はこういった視点もお伝えできればと思います。ご支援お願い申し上げます。